

Ishikawa, K., & Okubo, M. (2013).

The overestimation of stimulus durations in social anxiety.
21st Annual Meeting on Object Perception, Attention, and Memory,
Sheraton Centre Hotel in Toronto, Ontario, Canada.

石川 健太

種々の不安障害に共通する特性として、脅威刺激に対する注意制御の障害がこれまで指摘されており (Eysenck, 1992), 不安傾向が高い人は脅威刺激に対して過度に注意を向ける傾向があると報告された (Bradley, Mogg, White, Groom, & De Bono, 1999)。例えば, Bar-Haim, Kerem, Lamy, & Zakay (2010) は全般性不安障害と時間知覚の関連について検討した。結果, 低不安群と異なり, 高不安群は中立顔よりも恐れ顔に対して時間推定の過大評価を行った。

全般性不安障害と社交不安障害のちがいとして, 社交不安障害をもつ人は他者からの怒りなど否定的な評価を恐れること, 他者の視線に対して敏感であることが報告されてきた (Clark and Wells, 1995; Rapee and Heimberg, 1997; Roelofs, Putman, Schouten, Lange, Volman, & Rinck, 2010)。Schmitz et al. (2012) によると, 社交不安をもつ人は中立顔の逸視を他者からの拒絶を表すものとして脅威を感じると報告した。一方, Roelofs et al. (2010) の研究では, 顔写真の表情と視線方向を操作した結果, 社交不安をもつ人では脅威刺激である怒り顔の視線方向が自身に向けられている場合に, 回避行動が促進されることを示唆した。これらの結果は, 脅威として認識されるためには表情だけでなく, 視線方向も重要な役割をもつことを裏づける。

そこで本研究では, Gil & Droit-Volet (2011) の研究を参考に, 表情刺激の視線方向が, 社交不安をもつ人の時間知覚に与える効果を検討する。先行研究に基づき, 社交不安をもつ人は脅威刺激に対して時間知覚の過大評価が生じる。そして, こうした過大評価は表情と視線方向で異なるという仮説を立てた。仮説に基づく予測として「1. 社交不安をもつ人にとって, 他者の中立顔の逸視は拒絶を表すため (Schmitz et al., 2012), 中立顔の正視よりも逸視に対する時間知覚の過大評価が生じるであろう。2. 他者の怒り顔の正視は, 他者からの自身に対する脅威を表すため (Roelofs et al., 2010), 怒り顔の逸視よりも正視に対する時間知覚の過大評価が生じるであろう」という予測のもと実験を行った。

参加者は私立大学の大学生, 大学院生, 59名であった。平均年齢は21.1歳, 標準偏差は2.8であった。

参加者を社交不安高群, 低群に分けるために, 笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野 (2004) の日本語版Brief Fear of Negative Evaluation Scale (以下, BFNE), 日本語版大学生用STAI (清水・今栄, 1981) を実施した。BFNE得点の中央値 (46) より高い得点の人を社交不

安高群，低い人を社交不安低群とした。

表情刺激として石川・岡村・大久保（2012）からモデル（8名）×表情（怒り顔，中立顔）×視線方向（正視，左右逸視），合計で48枚の顔写真を用いた。課題はGil & Droit-Volet（2011）の時間二等分法を用いた。実験は学習課題，練習課題，試験課題の3段階で構成された。学習課題では基準となる二つの提示時間（400 ms，1600 ms）を学習し，その後，練習課題において基準時間の学習が成立したか確認した。試験課題では表情刺激が400，600，800，1000，1200，1400，1600 msのいずれかの条件で提示された。参加者は刺激の提示時間が，学習課題の短い提示時間（400 ms）に近い，あるいは長い提示時間（1600 ms）に近いかの判断を求められた。試行数は全896試行であった。実験計画は社交不安（高群，低群），表情（怒り，中立顔），視線（正視，逸視），ブロック（前半，後半）の5要因混合計画であった。

実験計画に示した条件ごとに，参加者が“長い提示時間”と判断した割合を算出し，5要因の分散分析を行った。その結果，社交不安，表情，視線，ブロックの交互作用が有意であったため（ $F(1, 57) = 4.1, p = .046, \eta_p^2 = .07$ ），ブロックごとに社交不安，表情，視線方向の分析を行った。その結果，ブロックの後半で社交不安，表情，視線方向の交互作用が有意であったため（ $F(1, 57) = 11.3, p < .01, \eta_p^2 = .16$ ），表情ごとに社交不安と視線方向の分析を行った。その結果，中立顔条件にのみ社交不安と視線方向の交互作用があり（ $F(1, 57) = 12.0, p < .01, \eta_p^2 = .17$ ），社交不安高群は正視条件よりも逸視条件に対して時間知覚の過大評価が生じていた。一方，社交不安低群は高群と異なり，逸視条件よりも正視条件に対して時間知覚の過大評価が生じていた。

本研究では社交不安低群と異なり，社交不安高群は中立顔の逸視に対して時間知覚の過大評価をおこなった。この結果は，Schmitz et al.（2012）の報告を裏づけるものであり，社交不安をもつ人は中立顔の逸視に対して注意を向けることによって，脅威刺激に対する時間知覚の過大評価を行ったことを示唆する。この結果は，社交不安をもつ人は脅威を感じる状況に対して，客観的な時間経過よりも時間を主観的に長く感じていることを示唆する。こうした脅威に対する時間知覚の過大評価は，脅威に対する回避傾向を高めるなどの症状の維持に関わっているかもしれない。